

## 二 北条早雲の時代そううん

### 1 早雲の出生しゅつしょう

北条早雲うんの正しいよび方は伊勢新九郎盛時いせしんくろうもりときと言います。びつちゆうのくに おかやま たかこしやまじようしゆ備中国（岡山県）の高越山城主であった伊勢盛定もりさだの次男じなんに生まれたという説が有力です。伊勢盛定は、むろまちばくふ しようぐんあしかがよしまさ室町幕府八代將軍足利義政のそばつかに仕えており、早雲もよしひさ義政の子・義尚に仕えていました。

伊勢盛時は、「北条早雲」とよばれますが、盛時が生きている間には、自分のことを「北条早雲」と名乗っていません。「北条」と名乗るのは、早雲の子の北条氏綱うじつなからです。盛時は、お坊さんになってから「早雲庵宗瑞」と名乗っていたことが、さまざまな文書などからわかっています。ですから本当は「宗瑞」とよぶのが正しいのですが、この本では一般になじみの深い「北条早雲」とよんで話を進めていきます。



## 2 早雲、小田原へ

まだ若い早雲が將軍のそばで仕えていたころの京都は、十一年も続いていた戦乱(せんらん)の乱のために、町の中は荒れ果て、人々は盗賊(とうぞく)におびえ、飢えに苦しんでいました。

「みなが安心してくらせる国だったら、こんなに苦しむ人もいないのに・・・。」

京都の人々が苦しんでいる様子を見て、早雲は人々が安心してくらせる国をつくりたいと学問に励んでいました。

いっぽう、早雲の姉である北川殿は、駿河の国の今川家にとついでいました。当時の今川家は、あとつぎを誰にするかでもめていました。京都にいた早雲は駿河に出向き、今川家のもめごとを解決しました。そのときの働きなどにより、一四八七年に早雲は興国寺城(今の静岡県沼津市)を与えられました。



そのころの伊豆いずは、八代將軍足利義政しょうぐんあしかがよしまさの弟の足利政知あしかがまさともが支配していました。政知が病気で死んでしまうと、その子の足利茶々丸ちやちやまるは母と弟を殺して、強引ごういんに政知のあとをつぎました。

「自分が支配したほうが、伊豆の国の人々は幸せになるはずだ。茶々丸には誰もついてこないだろう……。攻めるなら今だ！」

と、早雲は伊豆に攻め入りました。そして、韭山城にらやまじょう（今の伊豆の国市）を新しい拠点きょてんにして、伊豆地方の政治を始めました。早雲は生がい、この韭山城まぐに住み続けました。このことによって、関東地方で戦国時代の幕があがったのです。

その後、早雲は、相模さがみの国西部を治めていた大森氏に代わって小田原城を手に入れた、関東を支配するための拠点としました。

## 今に伝わるエピソード

その当時の伊豆<sup>いず</sup>は、米や農作物がなかなか  
できず、飢え<sup>う</sup>によって、人がばたばたと死ん  
でいました。しかし、伊豆を治めていた  
茶々丸<sup>ちやちやまる</sup>は、人々を救うどころか、厳<sup>きび</sup>しく年貢<sup>ねんぐ</sup>  
を取り立て、まわりの国ぐにと戦<sup>いくさ</sup>ばかりし  
ていました。当然のことながら、家来や農民  
からは、全く信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>されていませんでした。  
興国寺城と伊豆は近いので、早雲は伊豆の  
人々が苦しんでいることもよく知っていました。  
早雲は「たとえ飢饉<sup>ききん</sup>がおこっても、領主<sup>りょうしゅ</sup>  
が欲張<sup>よくば</sup>らず、ぜいたくをせず、人々とともに苦しむ覚悟<sup>かくご</sup>を決めれば、必ず人々を救うこ  
とができる。」と考えていました。



## 今に伝わるエピソード

伊豆いずに入った後、早雲は次に相模さがみの国の支配しはいを考えていました。当時の小田原城主じょうしゅは大森藤頼。藤頼は伊豆の早雲のことを用心し、心を開いて接することはありませんでした。そんな藤頼に早雲はたびたび贈りおくものをしました。そのうちに藤頼は早雲に心を許ゆるすようになり、親しくなっていました。

ある日、早雲は「箱根山で鹿狩りしかがをしたいので、鹿を追う兵へい（勢子せこ）を箱根山に入れさせてください。」と藤頼に頼たのみました。早雲のことをすっかり信用するようになっていた藤頼は、兵を箱根山へ入れることを許しました。早雲は、鹿追いの勢子の扮装ふんそうをさせた軍勢を箱根山に入れ、角つのに松明たいまつをくりつけた千頭の牛とともに、小田原城を一気に攻めさせました。牛の足音や兵士たちの大きなさけび声を聞いた小田原城の人々は、「敵だ！たいぐん 敵の大軍がきた！」と大混乱だいこんらんになり、あわててふためくばかりでした。藤頼は命からがら城から逃げ出し、早雲は小田原城を手に入れることができました。

この話は創作であると言われていますが、小田原駅西口にある早雲像は、この話にある小田原城を攻めたときの早雲の様子を伝えています。

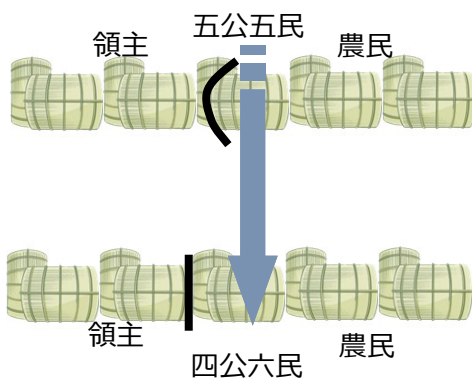


### 3 領地の人々を大切にした早雲

わずか三十日で伊豆の国を平定したと伝えられるほど、早雲の政治は短い期間で伊豆の国に広まっていきました。（実際には七年かかりました。）

早雲がおこなったことの一つに、検地があります。小田原周辺で田畑の面積をもとに、年貢の額を決めるためでした。この検地によって、その土地の支配者が早雲であることを示すことにもなりました。検地といえば豊臣秀吉がおこなった「太閤検地」が有名ですが、早雲がおこなった検地は、この後全国の戦国大名がおこなった検地の最も早い例とされています。

また、早雲は年貢を五公五民から四公六民に引き下げ、領民の負担を減らす改革をおこなったとも言われています。ほかに、兵士が乱暴をはたらくことを厳しく禁じたり、はやり病から人々を救うために京都から薬を取り寄せたり、何よりも領民の生活を第一に考えていた早雲は、領地の多くの人々から大変したわれていました。



#### 4 相模を平定する

このころ、相模の国の中部から東部までを支配していたのが三浦氏みうらしです。三浦氏は、岡崎城おかざきじょう（今の伊勢原市）を拠点にして、三浦半島に勢力を広げていました。三浦氏は、源頼朝が平氏を倒す戦に参加し、鎌倉幕府を開く時にも大きな力を発揮しました。早雲にとつて、三浦氏はかなりの強敵でしたが、力を着々とたくわえていた早雲は、激しい戦いの末、一五一六年に三浦氏をほろぼし、相模地方のすべてを支配するようになりました。早雲が小田原城に入ってから、二十年の月日が流れていました。

#### 今に伝わるエピソード

あるとき早雲は、二本の大きな杉の木を鼠が根元から食い倒し、やがて鼠は虎に変わったという夢を見ました。二本の杉はこの時代に関東地方の支配を争っていた山内上杉家と扇谷上杉家のことで、鼠は子年生まれの早雲のことを表しているようです。この夢は、二つの上杉氏をほろぼして、早雲が関東を支配するという目標を持ったことを表す夢だと言われています。

## 5 早雲そううんの死

一五一八年、早雲は北条氏の長を氏綱うじつなとしました。そしてその次の年、荏山城にらやまじょうでその波乱はらんに満ちた人生を閉じました。あとをついだ氏綱は、箱根町湯本に寺を建て、早雲をほうびりました。その寺は早雲寺と名づけられました。

### 今に伝わるエピソード

早雲そううんは『早雲寺殿二十一箇条』という家のきまりをつくり、北条氏の今後の進むべき道を示したと言われています。その一部を紹介します。

- ・第一に神と仏を信じ、大切にすること
- ・朝はつねに早く起き、夕刻ゆうこくは五ツ（午後八時）までには寝ねなさい。
- ・刀や衣装いしやうは見苦しくない程度で満足し、決して華美かび（はで）になってはならない。
- ・どんな場合でもうそを言っではならない。信用を失い一生の恥はぢとなる。

五百年ほど前に書かれたきまりですが、今の世の中でも大切にしたいことばかりです。大切なことは、今も昔も変わらないことがわかります。



早雲寺